

にくらしくらしくらしき

大阪の谷川さんから大きな大きな封筒が送られてきた。開けてみると大阪支部連の連続10巻をやるというポスターが出てきた。チマチマ、ゴージャスとしたどうにも変なポスターである。ハハーンこれが都会的な近代的なポスター作りじゃなと感心して眺めていると、ぼつぼつ懐かしい名前が眼に入ってくる。更に眺めていると懐かしい顔が思い浮かんでくる。「あッ、沢田さんここにちわ、お久しぶり」なんて声かけてみる。

更に詳しく見てみるとこの10巻は日曜日が全滅である。こりゃいかん。いや、こりゃめめた。いや、やっぱりいかん。56日もの間続けられる10巻群に日曜日はオール休みなのだ。

「残念や、谷川さん。ちよっとお邪魔せんわ。それはそうして、あなたの写真の題、くらしくらしきはなかなか憎らしい題ですなあ。」

ポスターをひよいと裏返してみたらなんと1/4キネ肉が未裁断のまま9枚も印刷されている。ウーン成るほど考えたが、これがこのポスターが面白くなった仕掛けかア。ご成功を祈りながら。

西井さん 賢さん 頑張ってくれてありがとう
写真アリズム45号の売れ行きです。西井さんと賢さんの10冊ずつは計算外でした。有難う。おかげで書籍係の清水さんニコニコの電話。「どこまで後何冊の残りや？」と僕。「あと21冊や」と清水さん。「それであなた自身は？」「残ったら全部買っておくつもりや。それにナ、宮間さんが、ヨキニハカラエだけ買ってくれるんや。」
「なんや、その、ヨキニハカラエだけ買うというは？」
「おマエさんに任かる、おマエさんの計らいで買うということやろ。」
「フーン せんなら150冊は全部売り切れたようなもんやなあ。」
「ン？ン。」
というわけで写真アリズム45号は消化完了です。後はゼニを賣って本を渡すだけ。 皆さんありがとうナ。



酒豪列伝より

「お酒なら4升6合 飲んだことありますよ。ボトルならストレートで2本かな。それでも酔いません。まあ近頃はやめてます」
ヒヤア すこい。
これはなんとあの谷川さんのこと。この間の古市公民館の例会あとのだんらんの時のお話である。後、あと少々で58才(だったかな)。本職は刺しゅう家。

「若い奥さん達にとり囲まれて教えていると それはもう〇〇〇〇していいもんです」
「いや月謝もらっていると、そんなあなた〇〇〇〇でなごこと」
「いや 又って美しいものですよ」

面白かった面白かった。まじめ一臭の谷川さんがあんな艶やかな話を、それがとても上品だった。

印画の黒のトーンの大切
きまぐれ講座(1)

名いかに鼻ひげの似合ひ武内君や、お京姐と仇名奉った賢京子さんや、鈴鹿の箱の庄屋の松尾君たちがやっている人形劇。その人形劇のある日のサマをちよっと写して高藤君の写真のこと—それがこの黒のトーンの大切の発端である。

その作品は、ふたつの人形が黒っぽい印画の中に白く浮かんでいる写真。人間の手も、小道具も何も他には写っていない、写真的には先ず平凡なワンショット。そしてその写真が一枚。

その夜は鈴鹿の例会だった。例によって松尾君の家の広場間、ストーブが2台あって暖かく、まん中には心づくしのあやツカ。その中にはバランサインター(写機のフック)も。

実はそれまで、同じく人形劇をテーマとした松尾君の写真が20枚ほど並べられていた。

「どうしてバックがこんなふうなの？」
「この2本の蛍光灯は、さげられたのか？」
「これでは人形劇の説明写真や」というような仲間たちの酷評を浴びて松尾君がニコニコと自分の作品を退治させた後のことだったのである。

そしてその後おすおすとしてきた一枚の写真がこの高藤君の写真だった。ア

34号遠う所10ヶ所の答

本当は12ヶ所の方がう所がある。それを見つけてから答を見たら!

- ① 先ず左上のガク枝入りの絵の中の雲
- ② その雲の下の模様
- ③ 花瓶横すじのう
- ④ CONTESTのの字
- ⑤ 中央右寄りのカップがさし挙げているツミキの横棒
- ⑥ そのカップの乗っている踏み台の穴
- ⑦ ショボンでいるカップの腕時計
- ⑧ 右側のカップの髪のも
- ⑨ そのカップの口許
- ⑩ 画面左の方の戸棚の戸の引き手
- ⑪ その左下、積んだツミキの土台の柱
- ⑫ 右上、ドアの窓

さてこの間だいを

全然やらなかった人	あなたは 便所とウンコとだけか
3ヶ所だけ投げ出した人	写真も投げなはれ
5ヶ所だけあきらめた人	単写真に徹する
7ヶ所だけやめた人	単写真も粗写真もナ
10 出来た人	理想的、あなたは 創作意欲は長
12 やった人	あなたは 3700人

↑ 作者は若冠19才、とても温和な青年である。本人は新米の僕が、といった遠慮がいはい。

さあさあ、それがえらいことになってきた。皆かそのために一枚の写真を抱んでうーん。僕もどれどれと身をおも出した。なるほど……。

ふたつの人形は、いやふたりの人形は、暗い舞台上で見事なにかを演じているのである。頭のかたらかととも楽しいかたらのお爺さんが、足もとにうずくまった子どもに何やら話しかけているのである。まるで、そのストーリーに魅せられた子供のような気持ちになって僕はしばしば見とれた。人形そのものは松尾君の作品で存分見せて貰った人形である。それがなんと見事に感情を表現している。

それは何故か、何故そのように魅せられたのか。舞台になった黒い布をかぶせられた机。その黒い机と、~~光り~~光りの届きかたの壁と、それが僅かにトーンの異なる天井、この単純な黒、黒、黒の中に↑

支部会員 新人2名紹介

武内 治さん(25) イラストレーター(鈴鹿)

河村 好夫さん(30) 病院事務(五ヶ所)

↑ たしかに黒のトーンの差があるのだ。画面に奥深さが、グーンと出ている。たまたまそれだけのことだった、でもその画面効果かこれほどにも目を魅了してしまつたのである。皆さん、黒の深みを大切にしよう。

(後記) 34号は3月になると自分で思っていた。それは視点感応の「詰め作業」のため七転八倒している自分を想像できたからである。案の上、それは当然だった。今八転九倒しています。画題を難産です。仕事を新美君がいなくなつてから昔よりにかんかん張切っています。さあそうなつたら無性に百万石発行に挑戦したくなりました。逆。そんなわけで頑張つたつもりですが、やはり粗製部分かできました。お許し下さい。かんいん、許せ、ごめん。